

文字の書かれた大刀－象嵌銘文大刀

西山要一

1. はじめに

古来、刀剣や鉢や槍には、戦いにおいて敵を殺傷し身を守る実用の武器としてのはたらきのほかにその呪力によって敵や病気や災いを降伏して、身を守るはたらきをもつものがある。

古墳時代、豪族や有力者が死亡すると古墳に葬られ、死後の世界でも権力を維持し、幸福な生活を続けることができるようとの願いから、鏡・玉・刀剣・甲冑・農具・工具・土器など様々な品物が副葬された。

古墳に納められた刀剣は膨大な数にのぼるであろうが、現在までに全国で数万点も発見されているものと思われる。その中に僅かであるが、文字の記された刀剣が発見されている。鞘や刀身に墨で文字が書かれたり、刀身に文字が彫られていた場合も想定されるが、木鞘は腐り、鉄の刀身は鏽が進んで鉄鏽の固まりになり文字は残らない。鉄の刀身に文字を彫って、そこに金や銀や銅を嵌め込む、いわゆる象嵌の技法で記された場合にのみ、鉄さびの中に辛うじて文字が残り、読み取ることができる。さらには、同じような象嵌技法で刀身や柄頭・鐔などに文様装飾された、象嵌文様大刀はおよそ 300 点が発見されている。

同じ古墳時代の文字資料としては、鏡に記された銘文が多く知られている。年号のほか作者名や長寿を願う吉祥句等が記されるが、形の決まった句になっている。しかし、象嵌銘文大刀には、年号のほか、刀剣を作った由来、辟災・招福の願い、銘文を書いた人物名、大刀の作者名、等が記され、文章内容はよりバラエティーに富み、古墳時代を探る貴重な資料となっている。また、飛鳥時代以降の象嵌銘文大刀についても、同様に極めて重要な歴史資料であることは言うまでもない。

さらに、最近急速に発展しているX線透過写真の撮影・X線分析・電子顕微鏡調査などの科学調査によって、象嵌銘文大刀を創り出した知識や技術や意義等が解き明かされつつある。古墳時代や古代の人々は銘文大刀に何を思い、何を期待していたのかを解き明かすことができるのである。

本稿では、象嵌銘文のある刀剣（象嵌銘文大刀）の銘文と、科学的分析データーを中心に、日本の象嵌技法や象嵌大刀の意義を探るものである。

2. 日本・韓国の象嵌銘文大刀

日本で発見された象嵌銘文大刀のうち、古墳時代の大刀は、古墳から発見されたもの 7 点、神社に

伝わるもの1点、文献資料に記録されているもの1点、の合わせて9点が知られている。また、飛鳥時代以降のもので神社・寺院に伝わるもの3点、文献資料に記録されているもの3点がある。さらに、韓国の三国時代の古墳から発見されたもの2点がある（表1・2、図1～5）。

(1) 漢中平紀年大刀（図2-1, Fig.2-1）

奈良県天理市槙本の丘陵上にある全長140メートルの大型前方後円墳である東大寺山古墳より発見された鉄製の直刀である。大刀は全長110センチメートルを計り、銅製柄頭は家形を内部にもつ環頭の形式である。銘文は、刀の棟に切っ先より関に向かって

中平□年五月丙午造作支刀百練清剛上應星宿下辟不祥

の24字が金象嵌されている。中平は中国の後漢の中平年間に当たり、西暦184年から189年のいずれかの歳にあたる。科学分析やX線写真撮影等は行われていないが、鉄鏽に埋もれていた象嵌の表出作業とその記録によると、糸象嵌であることが判明する（註1）。

(2) 七支刀（図2-2, Fig.2-2）

奈良県天理市の石上神社に伝世されている七支刀は、全長84センチメートルを計り、両刃の剣の左右に互い違いに各3本ずつの角が着く特異な形の鉄剣である。剣の両面に、切っ先より関に向かって表に

泰和四年五月十六日丙午正陽造百練鍛七支刀世辟百兵宜供供侯王□□□□作
裏に

先世以来未有此刀百濟王世子奇生聖音故為倭王旨造伝示后世

の計61文字の銘文が金象嵌されている。泰和四年は西暦369年にあたる。

金象嵌線の剥落している文字が多くあるものの、象嵌の鑿溝の多くが鮮明に残っていて、この象嵌が糸象嵌技法によるものであることが判明する。また、奈良国立文化財研究所によって金象嵌線のX線分析が行われ、金純度79%であることが公表されている（金以外の含有成分は未公表である）。

この七支刀については、『日本書紀』神功皇后撰政五二年の条に

・・・・・五二年秋九月丁卯朔丙子、久氏等從千熊長彦詣之。則獻七支刀一口・七子鏡一面、及種々重寶・・・・・

との記述が見られ、これに該当するものとして注目される（註2）。

(3) 『塵袋』護身剣

鎌倉時代の百科事典ともいわれる『塵袋』には、朝廷に伝わる刀、大刀契について次のように記述されている。

・・・・・大刀ノ中ニ靈劍ニアリ、百濟國ヨリタテマツル所ナリ。一ヲハ三公戰闘ノ劍ト名ク
又將軍ノ劍トモ破敵ノ劍トモ云フ。護身ノ劍ハ疾病邪氣ヲノゾク。劍ノ左ニハ日形南斗ノ六星朱雀
ノ形青龍ノ形ヲ図ス、右ニハ月形北斗七星玄武形白虎ノ形ヲ図ス。破敵ノ劍ニハ左ニハ三皇五帝ノ
形南斗ノ六星青龍ノ形西王母カ兵刃符ヲ図ス、右ニハ北極ノ五星北斗七星白虎ノ形老子破敵ノ符ヲ

表1 日本の象嵌銘文大刀
Table 1 Swords with inlaid characters in Japan

| 名 称 | 発 見 地 | 刀 剑 ・ 銘 文 | 製 作 地・年 代 |
|-------------|---------------------------------|---|-------------------------------|
| 1 漢中平紀年大刀 | 奈良県天理市 東大寺山古墳 前方後円墳 140 m | 全長 110 cm 刀棟・金象嵌 24字 | 中国・後漢 中平年間 (184 ~ 189年) |
| 2 七 支 刀 | 奈良県天理市 石上神社 伝世 | 全長 84 cm 剣両面・金象嵌 61字 | 韓国・百濟 泰和4年(369年) |
| 3 『塵袋』護身劍 | 『塵袋』記載 | ? 刀 棟・? 46字・他に符図 | 韓国・百濟 3~5世紀 |
| 4 王賜銘鉄劍 | 千葉県市原市 稻荷台1号墳 円墳・径 18 m | 復原長 73 cm 剣両面・銀象嵌 12字 | 日本 5世紀 |
| 5 辛亥銘鉄劍 | 埼玉県行田市 稻荷山古墳 前方後円墳 119 m | 全長 73.5 cm 剣両面・金象嵌 115字 | 日本 辛亥年(471年) |
| 6 銀象嵌大刀 | 熊本県菊水町 江田船山古墳 前方後円墳 62 m | 残存長 90.5 cm 刀棟・銀象嵌 74字・他に文様 | 日本 5世紀 |
| 7 額田部臣銘大刀 | 島根県松江市 岡田山1号墳 前方後方墳 24 m | 残存長 60 cm 刀佩表・銀象嵌 残 18字 | 日本 6世紀 |
| 8 戊辰銘鉄刀 | 兵庫県八鹿町 箕谷2号墳 円墳・径 16 m | 残存長 68 cm 刀佩裏・銅象嵌 6字 | 日本 戊辰年(608年) |
| 9 金錯銘直刀 | 群馬県下の古墳 | 全長 77.5 cm 刀佩表・金象嵌 4字 | 日本 7世紀 |
| 10 丙子椒林劍 | 大阪府大阪市 四天王寺 伝世 | 残存長 65.8 cm 刀佩裏・金象嵌 4字 | ? 7~8世紀 |
| 11 三 寅 剣 | 長野県小海町 個人蔵 伝世 | 残存長 34.5 cm 刀棟佩表・金銀象嵌 9字(梵字含)・その他 | ? 7~8世紀 |
| 12 坂上田村麿將軍劍 | 『昭訓門院御産愚記』 記載 | ? 剣両面・金象嵌 23字 | 日本 9世紀 |
| 13 相應和尚劍 | 『明匠略伝』 記載 | ? 劍・金象嵌 不動明王真言 | 巴子国(ペルシャ)? 中国? 9世紀 |
| 14 流廢寺鉄劍 | 福島県棚倉町 流廢寺跡 工房跡 | 残存長 43.4 cm 剣両面・銀象嵌 梵字 8字 | 日本 9~11世紀 |
| 15 複 祭 剣 | 山形県米沢市 上杉神社 伝世 | 全長 50.3 cm 剣両面・金象嵌 梵字 108字・他 | 日本 14~16世紀 |

表2 韓国・三国時代の象嵌銘文大刀
Table 2 Swords with inlaid characters in ancient Korea

| 名 称 | 発 見 地 | 刀 剣 ・ 銘 文 | 製 作 地・年 代 |
|-----------|--------------------|-------------------------------|-------------------|
| 16 有銘環頭大刀 | 朝 鮮 半 島 (伝韓國昌寧) | 残存長 27.5cm 刀棟・銀象嵌 残 16字 | 朝鮮半島 5世紀末~6世紀初 |
| 17 有銘圓頭大刀 | 韓國慶尚南道 昌寧校洞11号墳 | 全長 74.0cm 刀棟・金象嵌 9字 | 韓國 5世紀末~6世紀初 |

図ス。又護身ノ劍ノ銘アリ、カノ銘ニ云ク

歳在庚申正月百濟所造三七練刀南斗北斗左青龍右白虎前朱雀後玄武遼深不祥百福会就年齢延長万歳無極

・・・・・堀川院ノ御宇寛治八年十月廿四日ノ焼亡ノトキ靈劍ヤケ損シ又西王母カ兵刃符ワツカニノコレリ・・・・・

ここに記された護身劍の銘文は、形態や類例の検討、百濟で製作されたことなど、記事内容は正しいものと評価されている。そして、劍は焼亡したもの、文字・符が僅かに残っていることから象嵌銘文・象嵌符であったことはほぼ間違いない。劍は現存しないものの、百濟からもたらされたこと、破敵劍と一対で鎌倉時代まで伝世されていたこと等、他の銘文大刀の性格を考える上で極めて重要な文献記録である（註3）。

（4） 王賜銘鉄劍（図2-3, Fig.2-3）

千葉県市原市にある直径18メートルの円墳、稻荷台1号墳より発見された鉄劍である。鉄劍は闇付近を欠失するが、復原全長73センチメートル、この闇に近いところ劍表の鎬の右に偏して

王賜□□敬安

の4字、劍裏もやはり鎬の右よりに偏して

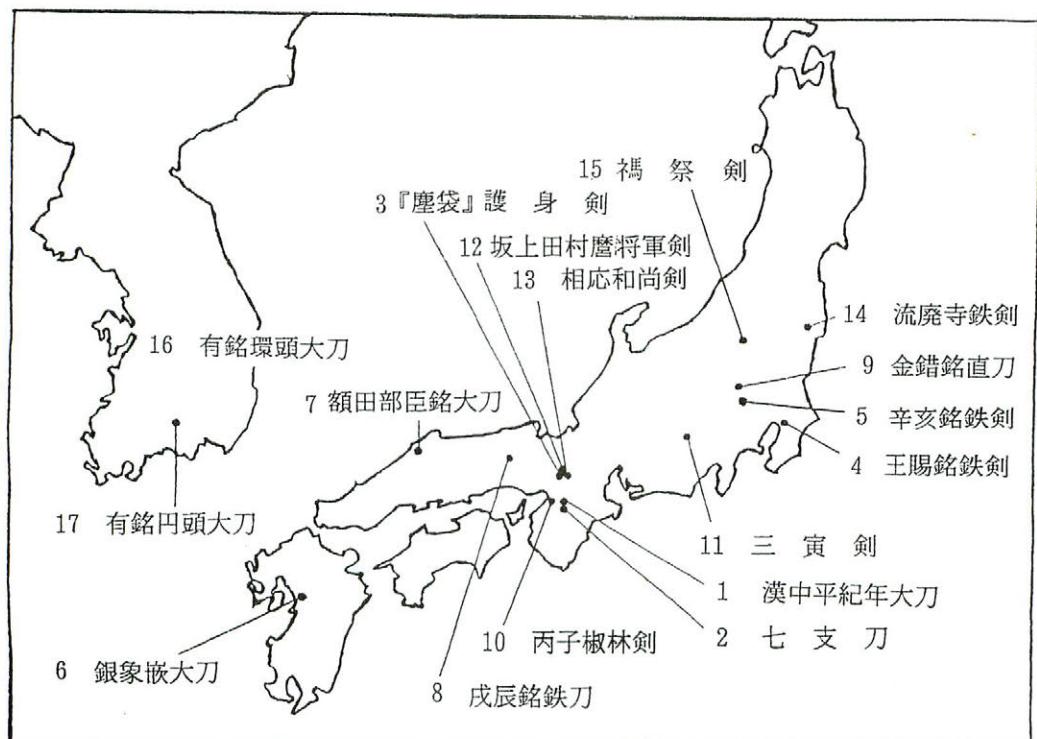


図1 象嵌銘文大刀分布図

Fig.1 Distribution of swords with inlaid characters

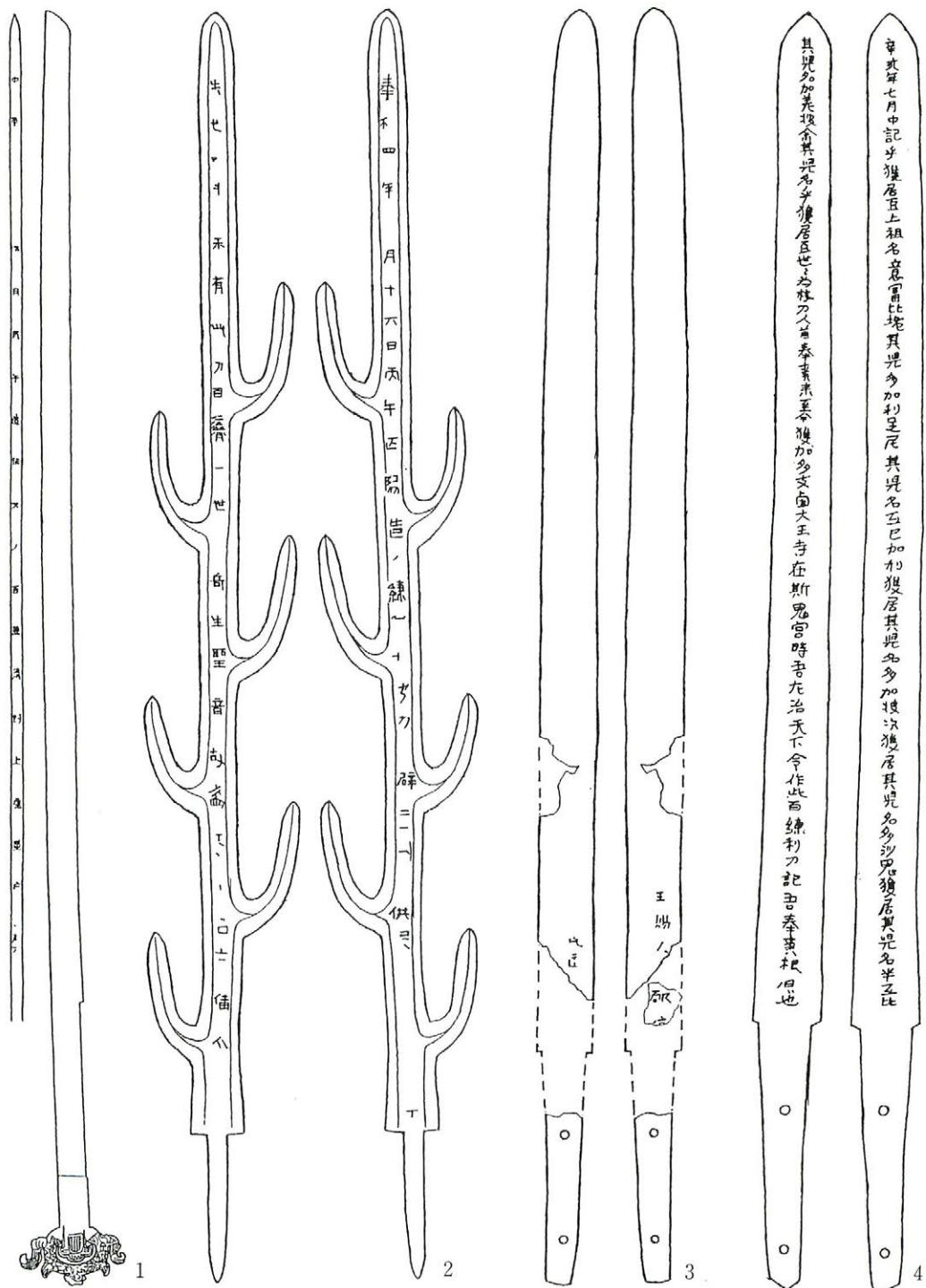


図2 銘文大刀 1 漢中平紀年大刀 2 七 支 刀 3 王錫銘鉄劍 4 辛亥銘鉄劍
Fig.2 Swords with inlaid characters

¹ Kanchūheikinen—tachi ² Hichishi—tō ³ Ōshimeい—tekken ⁴ Shingaimei—tekken

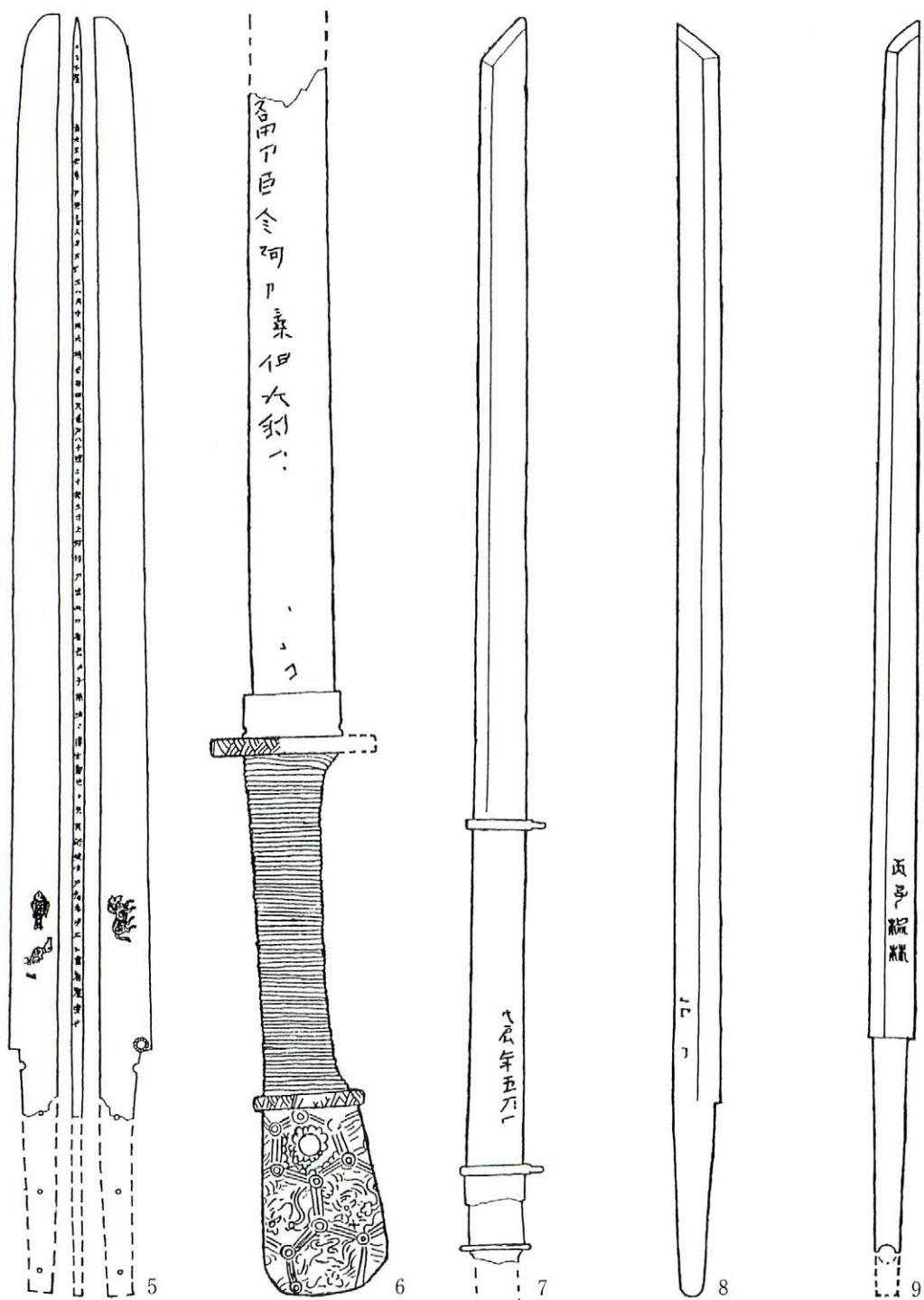


図3 銘文大刀 5 銀象嵌大刀 6 頸田部臣銘大刀 7 戊辰銘鉄刀 8 金錯銘鉄刀 9 丙子椒林劍
Fig.3 Swords with inlaid characters

5 Ginzōgan-tachi 6 Nukatabenoomimei-tachi 7 Boshinmei-tetto
8 Kinsakumei-tettō 9 Heishisyōrin-ken

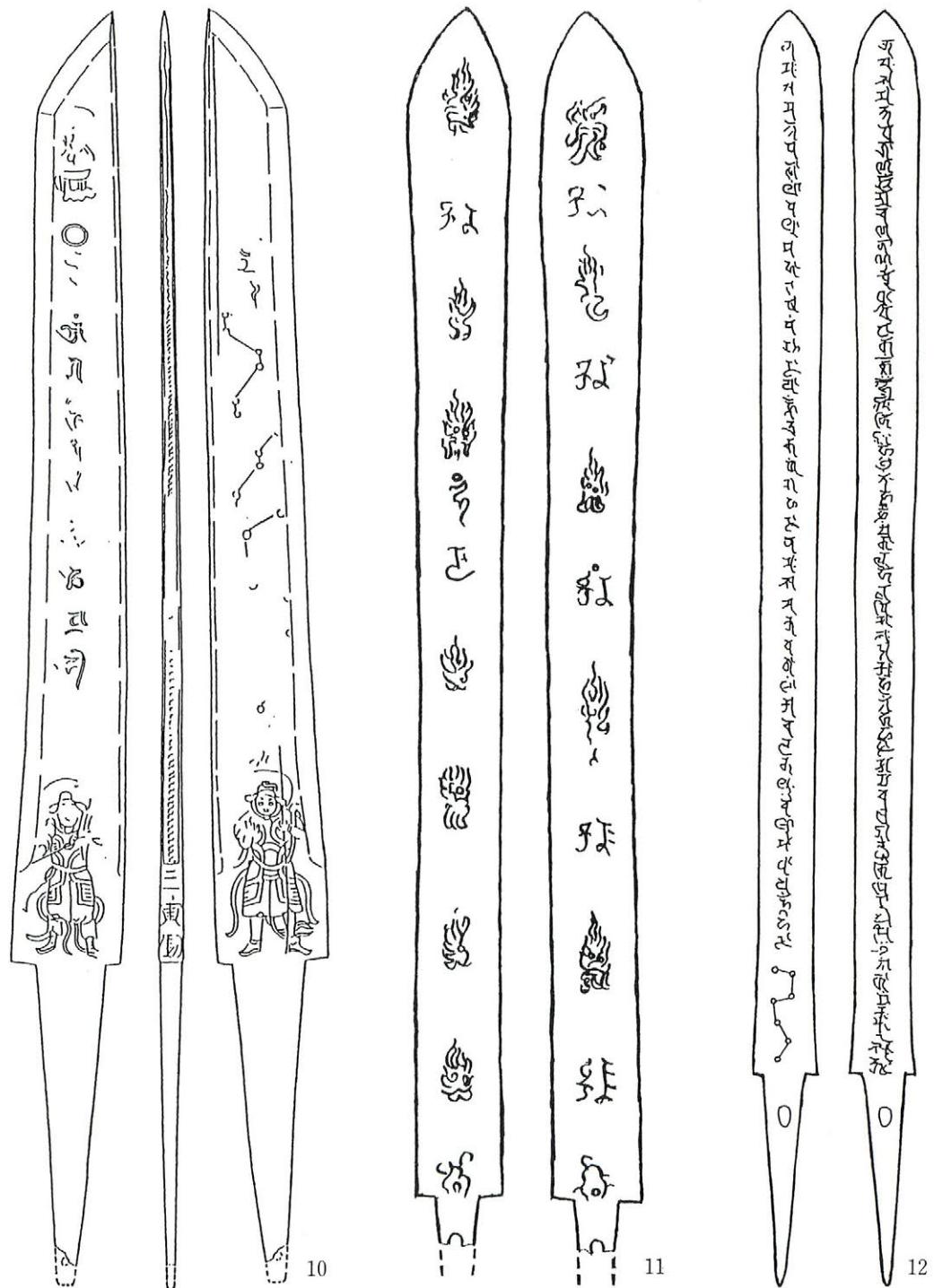


図4 銘文大刀 10 三 寅 剑 11 流廃寺铁剑 12 祔 祭 剑
 Fig.4 Swords with inlaid characters
 10 Sanin-Ken 11 Nagarehaiji-tekken 12 Basaino-tsurugi

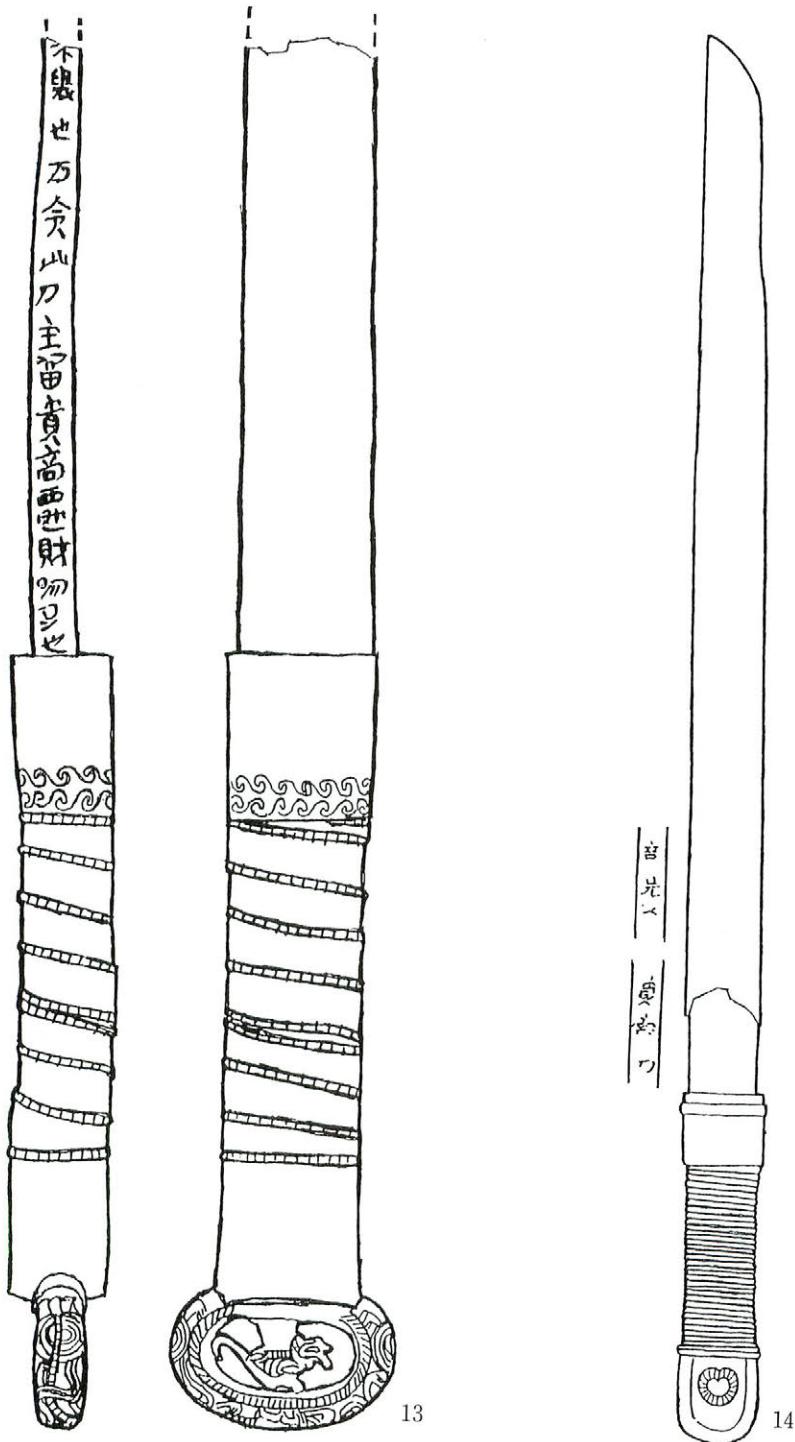


図5 銘文大刀 13 有銘環頭大刀 14 有銘円頭大刀

Fig.5 Swords with inlaid characters
 13 Yūmeikantōno-tachi 14 Yūmeientono-tachi

此廷□□□□

の2字の計6字が読み取れるが、文字間隔や銘文内容から表裏ともに6字ずつ計12字が記されていたものと推測されている。

既に発表されているX線写真の詳細な観察から、連続的に鑿を打ち彫った溝に象嵌線を打ち込む糸象嵌の技法であることが判る。また象嵌線の組成分析については、金が検出されたとの新聞報道を聞くがガラスケース越しながら展示された剣を見る限りでは銀象嵌に見える。これらのデータについては正式に記された調査報告書の刊行をまつ（註4）。

（5） 辛亥銘鉄剣（図2-4, Fig.2-4）

埼玉県行田市にある埼玉古墳群の一つ、全長119メートルの前方後円墳である稻荷山古墳は、古代武藏国の首長の墳墓であると推定される。

辛亥銘鉄剣は全長73.5センチメートルの鉄剣である。剣の鎬に沿って切っ先より間にむかって表に57字、裏に58字の計115文字の銘文が金象嵌されている。

表には、

辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意富比塊其児多加利足尼其児名豆已加利獲居其児名多加披次獲居其児名多沙鬼獲居其児名半豆比

裏には、

其児名加差披余其児名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事來至今獲加多支齒大王寺在斯鬼宮時吾左治天下
令作此百練利刀記吾奉事根原也

と記されている。総ての文字が残存しかつ完全に解読されるのは極めて珍しく貴重な資料である。辛亥年は西暦471年と考えられる。

辛亥銘鉄剣の銘文は、防鏽のための科学的保存処理作業の途上に発見され、様々な科学的分析が行われた。剣表面に僅かに残る鞘材と柄木材は、電子顕微鏡による樹種同定の結果ヒノキ科の木材であること、鉄剣鎬のX線分析の結果は、鉄剣の素材が中国揚子江流域の含銅磁鐵鉱を沙鋼法とよばれる独特の方法により精錬されたものであろうとの推測をもたらし、象嵌金線の蛍光X線分析および中性子放射化分析の結果は金73%・銀27%を示し、金の輝きを保ちつつ象嵌の作業性に適した硬さをもつ極めて合理的な合金比率であることを明らかにした。また、X線写真の詳細な検討や剥離した象嵌金線の顕微鏡観察などによって、鉄剣の表裏の鎬に沿って墨で銘文を書き、鑿で文字を刻み、金線を槌と鑿で打ち込み、表面をやすりで研磨して仕上げとする、この糸象嵌技法の方法と工程が初めて克明に復原されることになった。

これら辛亥銘鉄剣の材質や技法の科学的な研究の成果は、他の象嵌銘文大刀や象嵌装飾大刀の研究を深め、さらに象嵌銘文大刀の新発見をもたらすほどに大きな契機と示唆を与えるものとなった（註5）。

（6） 銀象嵌大刀（図3-5, Fig.3-5）

熊本県菊水町に所在する全長47メートルの前方後円墳である江田船山古墳は、古墳の規模や金銅製

冠帽や飾履など豊富な出土品から、後の肥後国にあたる地域の首長の墳墓であろうといわれている。

銀象嵌大刀は茎の約三分の二を欠く残存長90.5センチメートルを計り、鉄刀の棟に切っ先より関にむかって

治天下復圓國國大王世奉事典曹人名无利豆八月中用大鑄釜并四尺廷刀八十練六十據三寸上好□刀
服此刀者長寿子孫注々得恩也不失其所統作刀者名伊太加書者張安也

の74字の銀象嵌の銘文が記されている。辛亥銘鉄劍銘文中の「獲加多支國大王」と同名の「復加多支國大王」の名が記され、また、辛亥銘鉄劍の「杖刀人（大王に仕える武人）」に対して銀象嵌大刀の「典曹人（大王に仕える文人）」も古墳に葬られた人物を語っていて興味あるところである。銀象嵌大刀には佩表の関近くに馬と刃関孔の花形が、佩裏の関近くに魚と鳥がそれぞれ銀象嵌されている。

この鉄刀は大正時代にすでに発見されていて、文字の表出作業が砥石ややすりを使って幾度かなされたようである。その際、やや研ぎすぎたためか文字線画が三角形の列点状になっている部分がありこれにより辛亥銘鉄劍と同様の糸象嵌の技法であることが知られる。また、近年、東京国立文化財研究所による調査では、肉眼観察や顕微鏡観察では見ることのできない、すでに消失した文字が、新しい研究法であるエミシオグラフィー撮影によって確認されている（註6）。

（7）額田部臣銘大刀（図3-6 Fig.3-6）

島根県松江市に所在する全長24メートルの前方後方墳である岡田山1号墳は古代出雲国意宇郡の豪族の墳墓と思われる。

額田部臣銘大刀は刀身の半ばを欠き、残存する長さは60センチメートルを計る。銘文は大刀佩表の棟側に偏して

_____額田部臣令□素□大利刀□□□□□□

の推定18文字以上を銀象嵌する。いまは失われた刀身の上半部には、紀年や吉祥句が記されていたのであろう。

額田部臣銘大刀銘文もまた保存処理中に発見され、その機を利用して、様々な科学的分析がなされた。象嵌の銀線はX線分析の結果、ほぼ純度100パーセント即ち純銀であること、X線写真によって整体の運びや象嵌溝の形態が観察され、糸象嵌技法の典型例であること、また、この大刀を飾る鉄製円頭柄頭の亀甲繋双鳳文の象嵌と鍔を飾る文様象嵌の材質・技法も同様であること、などが判明した（註7）。

（8）戌辰銘鉄刀（図3-6，Fig.3-6）

兵庫県八鹿町に所在する箕谷古墳群のなかでは、やや規模の大きい直径16メートルの円墳である箕谷2号墳は、ごくありふれた古墳時代終末期の地方有力者の墳墓である。

戌辰銘鉄刀は茎を欠き、残存する長さは68センチメートルを計る。銘文は大刀佩表の関近く、棟に偏して

戌辰年五月申

の6文字が銅象嵌されている。戊辰年は西暦608年にあたる。

奈良国立文化財研究所の象嵌線の分析調査によると、ほぼ純度100パーセントの銅即ち純銅であることが報告されている。銅は伸展性に富み、程よい軟らかさがあつて象嵌に使い易いのであろう（註8）。

(9) 金錯銘直刀（図3-8, Fig.3-8）

金錯銘直刀は群馬県下のとある農家の縁側下にあったといわれる全長77.5センチメートルの鉄刀で出土地は不明である。刀研ぎ師が研究のために研いだところ、大刀佩表の関近く棟側に偏して4文字が金象嵌されているのが発見された。象嵌文字の残存状態が悪くて読み取れず、意味内容が不明であるのは残念である。銅象嵌ではないかとの説もある。

鉄刀のカマス切っ先の特徴や、戊辰銘鉄刀や後述の丙子椒林剣と類似していることから、7世紀の遺品と考えられる。（註9）。

(10) 丙子椒林剣（図3-9, Fig.3-9）

丙子椒林剣は大阪市の四天王寺に聖徳太子佩用の御剣として伝えられてきた直刀である。茎先端が僅かに欠失し、残存する長さは65.8センチメートルを計る。佩裏の関近くに

丙子椒林

の4字の銘文が金象嵌されている。

丙子椒林剣はそのカマス切っ先の形制から、飛鳥時代か奈良時代に製作されたものと考えられる。1200年以上の伝世中に幾度となく研磨された結果、刃部はかなりやせ細り、象嵌文字部分は周囲よりも浮き上がった状態になっている。そして、象嵌線を詳細に見ると、金線の一部に赤銅色の銅線らしきものが見受けられ、象嵌そのものも幾度か修復された可能性がある（註10）。

(11) 三寅釧（図4-10, Fig.4-10）

長野県小海町のもと神職家に伝えられている小刀である。茎先端を僅かに欠失するが、現存の長さ34.5センチメートルを計る。棟部の下端に

三寅釧

の銀象嵌銘を持つ。また、棟部の切っ先から三寅釧銘までの間には、両側を銀象嵌直線に挟まれた、直線・波状線・逆S字状文が連続して、銀象嵌で描かれている。

佩表・佩裏ともに、全面に象嵌文様が施されているものの、伝世中の幾度かの研磨により磨滅した部分が多く、不詳部分が多い。佩表には棟に沿った銀象嵌の直線のほか、3つの象嵌文様が施されている。切っ先の文様は意匠不明である。次に裏返しの三公・三台・北斗七星の星辰が順次並ぶ。そして、関近くに多聞天像が配置されている。星辰の星々を結ぶ繫線と多聞天像の顔の輪郭・幟・天衣の一部が金象嵌で他は銀象嵌である。

佩裏にも棟に沿った銀象嵌の直線のほか、3つの象嵌文字・文様が施されている。切っ先の文様は意匠不明である。次の梵字銘文は9字からなり、第1字はオーン、第2字はバであるほかは研ぎ減りのため判読できない。そして、関近くに持国天像が配されている。梵字銘文の第九字と持国天像の天

衣の一部が金象嵌で他は銀象嵌である。

さて、三寅鉄は前述のとおり、研ぎ減り著しく文様を不明にしている反面、象嵌技法の解説には好都合をもたらしている。即ち、本来一本の線であった象嵌線は、研ぎ減りによって小さな三角形の断続線となっている。これは、研磨によって糸象嵌の上面が削除され、象嵌線の底部のみが残されたものである。このことから、三寅鉄の象嵌は、彫り盤を打ち進めながら底が凹凸した溝を刻み、金および銀の線を打ち込み、砥石で研ぎ上たことが判るのである。X線透過写真およびエミシオグラフィー写真によってもこうした技法であることが確認された。

三寅鉄の造られた時代について様々な意見があるが、やや内反りのカマス切っ先であること、三公・三台・北斗七星の描写が正倉院や四天王寺の七星剣と類似すること、梵字が古体であること、多聞天と持国天の2天部像が古様であること等を勘案すると飛鳥時代か奈良時代の作とするのが妥当と判断される（註11）。

(12) 坂上田村麿將軍劍

『昭訓門院御産懸記』は、昭訓門院の産児の守刀として、急速使用した坂上田村麿將軍劍について次のように記している。

・・・・・ 件御劍後日拝見之、頗古物寶物歟、サメツカ、中心無之、銀ノツハ、平鞘、シロカネノセメ・イシ ツキ、黒地、但所々薄之歟、胡人狩獵之躰薄之、或鹿、或寅狩之、胡人騎馬馳或以弓射之、或以鉤 突之、其身鯨尾也、有刃、有銘、其詞云、

上上上 不得他家是以爲誓謹思

今一方

坂家寶劍守君是以爲名

劍身ヲ堀天以金入字也

入赤地錦袋如法古物也、其上又被納赤地錦袋云々、然而被獻之時撒上袋被納改白袋也・・・・・

この記録から坂上田村麿將軍劍には「上上上 不得他家是以爲誓謹思 坂家寶劍守君是以爲名」の23文字の金象嵌銘のあったことがわかる（註12）。

(13) 相應和尚劍

『明匠畧傳』の相應和尚の条には、巴子國劍について次の記載がある。

・・・・・ 同年。西三條女御有御惱。右大臣請和尚令加持。不幾平復。大臣爾感。奉巴子國劍。刃間以金鏤銘不動明王慈護明。此元者。入唐三品親王有志。自大唐被贈於〔 大臣之物也。爲稀有之寶。家爲殊勝之護。而感和尚 〕驗德所被奉也。朗善大德與和尚共同行夜出庵。不幾有大叫喚之聲。和尚走出見之。朗善橫出舌辟將死。和尚大驚揮劍加持。經三時許。以蘇生。・・・・・

右大臣藤原良相が相應和尚に贈った健康・安寧を不動明王に願う真言である不動明王慈護明が金象嵌された巴子國劍（ペルシャ型の剣のことか）は、もともと入唐三品高丘親王の持ち物で、在唐中の高丘親王が藤原良相に贈ったものという。高丘親王は皇太子として次代の天皇位を約束されていなが

ら、薬子の乱に巻き込まれて廃位となり、求道者となって中国・ベトナムからインドをめざす途上消息を絶つ数奇な運命を辿った人物である。不思議な経歴を持つ人物のもつ不思議な剣は、また、不思議な靈力剣ともなりえたのであろう。

相應和尚の剣の記事は貞觀3年(861)のこと、剣は現存しない。時代は異なるものの、後述の不動明王真言を金象嵌する襪祭剣に類似するものであろう（註13）。

(14) 流廢寺鉄剣（図4-11, Fig.4-11）

福島県棚倉町に所在する流廢寺跡から発見された鉄剣は、茎の過半を欠失し、残存の長さ43.4センチメートルを計る。福島県教育委員会等の発表によると、剣の片面には切っ先より



火焰状の文様と梵字を交互に配置し、他面には切っ先より

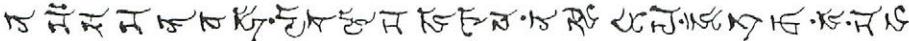


火焰状文様と梵字を不規則に配置して、両面合わせて梵字が8、火焰状文様が14、銀で象嵌されていることがX線透過撮影によって明らかにされた。今後行われる予定の保存処理や科学分析による新しい事実の発見が期待される。

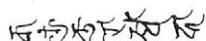
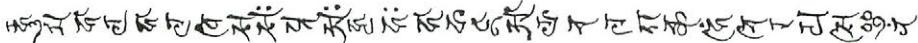
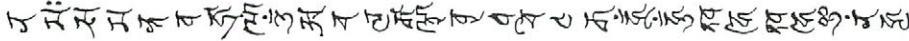
なお、流廢寺跡は平安時代の単純遺跡で、鉄剣の発見された遺構は鍛冶工房跡と推定されている（註14）。

(15) 襪祭剣（図4-12, Fig.4-12）

山形県米沢市に所在する上杉神社は上杉謙信を祀る。ここに、謙信が戦場において常に携行したといわれる襪祭剣が伝えられている。全長50.3センチメートルを計る。表には、



梵字25字よりなる不動慈救呪と、梵字21字よりなる無動金剛能成就一切事業杵印明第三が金象嵌されその下端、関に接して金の星と銀の繫線よりなる北斗七星が象嵌されている。裏には



梵字63字よりなる無動金剛劍印明が金象嵌されている。

本来、襪祭剣は、戦場にて摩利支天法修行に使うものであるから、本剣はこれとは性格を異にしている。諸魔・障難を降伏し、一切衆生を護ることを不動明王に願う「不動明王剣」とでも称されるべきものであるから、何時のころかに混同したものであろう。

本剣もまた、伝世の間に幾度か研磨されたと見られる研ぎ減りがあり、梵字・北斗七星の所々に楔形の連続部分が見られ、他の象嵌大刀と同様に糸象嵌技法による象嵌であることが判る（註15）。

(16) 有銘環頭大刀（図5-13, Fig.5-13）

東京国立博物館保管の朝鮮半島出土（伝韓国昌寧出土）の本大刀は、鉄芯銀張の单龍環頭大刀の形式で、1989年のX線透過撮影調査により象嵌銘文の存在が確認された。

刀身を半ば失い、残存する長さは27.5センチメートルを計る。保存処理の結果判明した銘文は、刀身の棟に切っ先方向より

不畏也□令此刀主富貴高遷財物多也

の16字が残存していた。刀身上半部には、紀年、製造の由来等の記載があったものと想定される。

象嵌線の分析結果は、ほぼ純度100%の純銀を使った銀象嵌であることを示している。（註16）

(17) 有銘円頭大刀（図5-14, Fig.5-14）

韓国慶尚南道・昌寧校洞11号墳より1919年に発掘された本大刀は、長く東京国立博物館に保管されていたが、後に韓国に返還され、1984年にX線透過調査によって銘文の存在が確認された。

本大刀は全長74.0センチメートルを計る銀装円頭の大刀である。銘文は棟下部に、切っ先方向より
菩先人□□貴□刀

の9字が象嵌されている。金象嵌であるが、象嵌線の科学分析はなされていない（註17）。

3. 象嵌の科学的分析と象嵌技法

X線分析装置・電子顕微鏡などを使った組成成分分析の調査・研究からも、象嵌技法について多くの事実が判明した。銘文大刀と象嵌文様大刀合わせて18例の分析結果を検討する（表3）。

(1) 象嵌銘文文字の組成成分分析

象嵌銘文大刀の保存科学的調査の発端となったのは辛亥銘鉄剣であった。

辛亥銘鉄剣の刀身は、中国江南地方の含銅磁鐵鉱を潮泥灰を用いて製錬する沙鋼法によって造られた素材を使っていること、象嵌線の濃度は金約73%・銀約27%（17.5金）で、美しいやまぶきいろの輝きを保つつつ、象嵌するに適した粘りと硬さであること、鑿で彫った断面V字状の溝に金線を打ち込む糸象嵌技法であること、樹脂が多くて剣の鞘には向きであるはずの桧が使われていること等、予想をはるかに超える成果が齎らされた。七支刀の象嵌線は金濃度約79.2%（19金）であることは既に記した。

額田部臣銘大刀の象嵌線は、X線分析により銀・塩素・鉄・アルミニウムが検出され、地鉄の鉄と銀鉄（塩化銀）の塩素と土壤成分のアルミニウムを除くと、銀のみが残り、定量分析を行っていないものの銀の濃度はほぼ100%と推定され純銀であろうと思われる。額田部臣銘大刀の円頭柄頭の亀甲繋双鳳文象嵌線も、X線分析により同様のデーターを得ている（図6）。

戌辰銘鉄刀の象嵌線は銅で、その濃度は約100%のほぼ純銅のものが使われている。

韓国三国時代の有銘環頭大刀の象嵌線の組成成分分析でも銀と鉄が検出され、ほぼ純銀であることが確認されている。

(2) 象嵌文様の組成成分分析

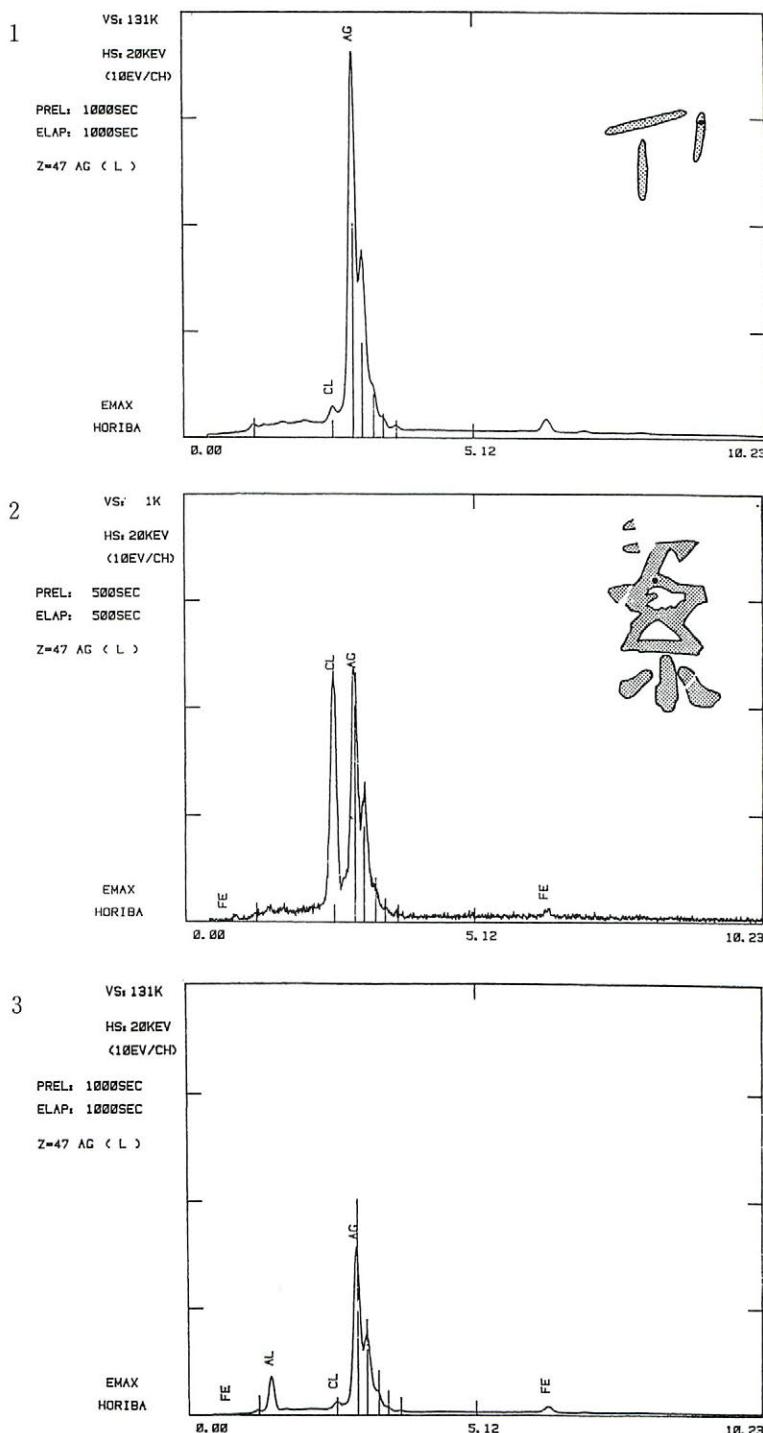


図6 頭田部臣鎧大刀象嵌線の分析 1 「部」字 2 「素」字 3 円頭柄頭亀甲文
Fig.6 Metallurgical analysis of the Nukatabenoomimei-tachi inlays

1 The character "be" 2 The character "so" 3 The tortoise shell pattern of the pommel

さらに、象嵌装飾大刀の象嵌線のX線マイクロアナライザーによる定性・定量の分析結果を検討する。

奈良県・星塚2号墳の円頭柄頭の亀甲繋双鳳文は、鉄地に金銀を象嵌する極めて稀な例である。亀甲繋の繋線と亀甲隅の二重円の外円は金象嵌で、二重円の内円と双鳳文（双鳥文）は銀象嵌である。

金象嵌線の分析の結果、金・銀・鉄・硅素・アルミニウムが検出され、鉄地の鉄と土壤成分の硅素・アルミニウムを除くと金と銀が残る。定量していないが金と銀の比は3:1~4:1で、銀を含む金であることがわかる。また、銀象嵌線の分析の結果、銀・鉄・硅素・アルミニウム・塩素が検出され、鉄地の鉄と土壤成分の硅素・アルミニウム、銀錫である塩化銀の塩素を除くと銀が残る。ほぼ純銀といって良いであろう（図7）。

兵庫県・勝福寺古墳北墳から発見された円頭柄頭は今は失われて詳細は不明であるが、僅かに残された金象嵌線の分析では、多くの金と少量の銀が検出され、金銀の合金であることがわかる。また、鞘口金具の龍文銀象嵌線の分析では、銀・鉄・硅素・アルミニウム・塩素が検出され、鉄地の鉄と土壤成分の硅素・アルミニウム、銀錫である塩化銀の塩素を除くと銀が残る。ほぼ純銀といって良いであろう（註18）。

岡山県・柳谷古墳からは2点の象嵌遺物が発見されている。頭椎柄頭は鉄地に銀で亀甲繋文を象嵌する。象嵌線の定量分析の結果、銀98.2%，鉄1.27%，酸素0.52%の値を得た。また、鞘尻金具は鉄地に羽状文を銀で象嵌する。象嵌線の定量分析の結果、銀90.89%，鉄5.85%，硅素0.16%，アルミニウム0.22%，酸素2.88%の値を得た。両遺物ともに鉄地に由来する鉄、土壤に由来する硅素・アルミニウムを除外すると、ほぼ純度100%の純銀にちかいものであることが判明する（図8・註19）。

三重県・垣内田2号墳からは、2点の象嵌遺物が発見されている。円頭柄頭は鉄地に銀で火炎状文を象嵌する。象嵌線の定量分析の結果、銀は96.52%，鉄は1.18%，アルミニウムは0.94%，塩素は0.61%，硅素は0.54%，銅は0.21%の値を得た。また、鞘尻金具にも鉄地に火炎状文を銀で象嵌している。象嵌線の定量分析の結果、銀は94.07%，塩素は2.41%，鉄は1.42%，銅は0.91%アルミニウムは0.82%，硅素は0.39%の値を得た。両遺物ともに鉄地に由来する鉄、土壤に由来する硅素・アルミニウム、塩素を除外すると、銅を微量に含むほぼ純度100%の純銀にちかいものであることが判明する（註20）。

長野県・本郷大塚古墳発見の円頭柄頭は、鉄地に銀で羽状文を象嵌している。象嵌線の定性分析の結果、銀・鉄・硅素を検出し、鉄地に由来する鉄、土壤に由来する硅素を除外すると、ほぼ100%の純銀であることが判明する（註21）。

大阪府・山畑22号墳の円頭柄頭には花文を銀象嵌する。象嵌銀線の分析では、銀・鉄・硅素・アルミニウム・塩素が検出され、鉄地の鉄と土壤成分の硅素・アルミニウム、銀錫である塩化銀の塩素を除くと銀が残る。ほぼ純銀である（註18）。

鳥取県・西穂波C3号墳の頭椎柄頭は鉄地に銀で亀甲繋文を象嵌する。象嵌線の分析の結果、銀・鉄

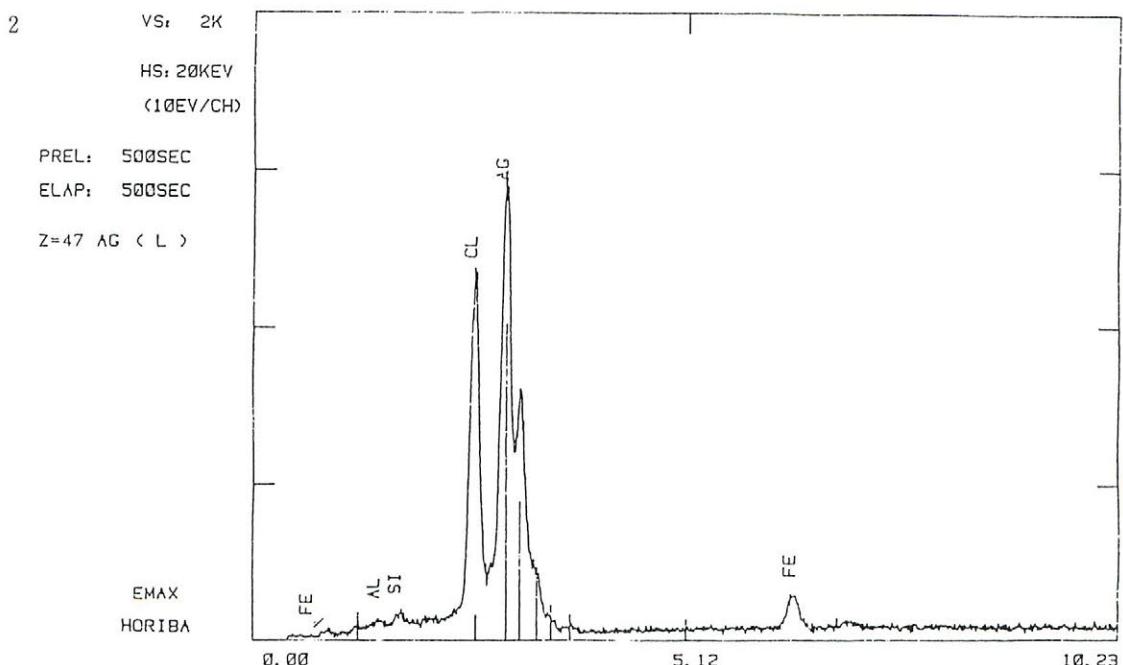
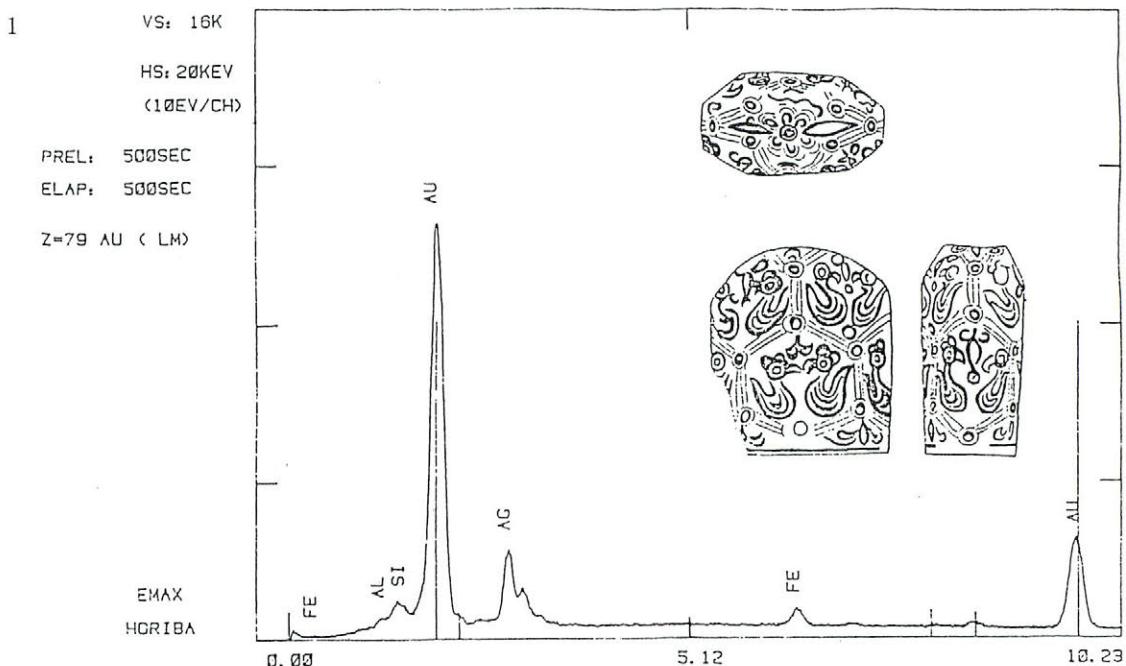


図7 星塚2号墳円頭柄頭象嵌線の分析 1 金象嵌線 2 銀象嵌線

Fig.7 Metallurgical analysis of the pommel inlays on the sword discovered at Hoshizuka-2gōhun tomb

1 gold line 2 silver line

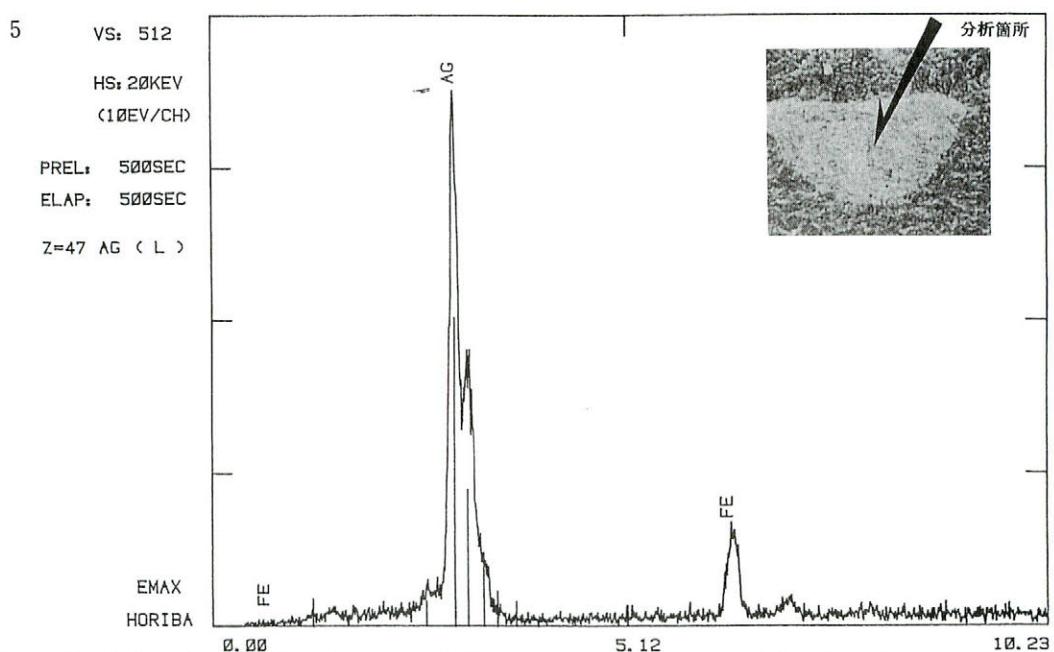
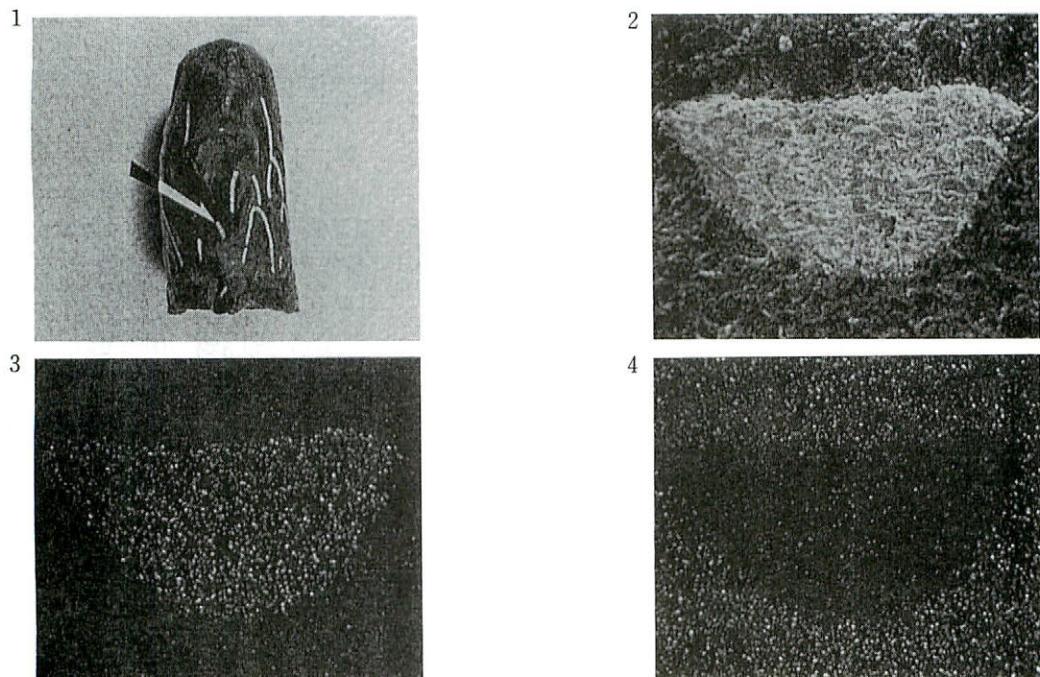


図8 柳谷古墳円頭柄頭象嵌線の分析 1 分析位置 2 象嵌線断面の二次X線像 3 同前の銀分布
4 同前の鉄分布 5 象嵌線の分布チャート

Fig.8 Metallurgical analysis of the pommel inlays on the sword discovered at Yanagidani-Kofun tomb

- 1 analysis point
- 2 section of inlaid line by scanning electron microscope
- 3 distribution of silver in the section
- 4 distribution of iron in the section
- 5 analysis of inlaid line section

表3 象嵌銘文大刀・象嵌大刀の象嵌線の組成成分

Table3 Composition of inlays

(weight %, ◎ rich, ○ poor or trace, ——none)

| 大刀名称 | 象 嵌 線 の 組 成 成 分 比 (%) | | | | | | | | 備 考 |
|-------------------------|-----------------------|---------|-------|-------|------------|--------|--------|---------|--------------------------|
| | 金(Au) | 銀(Ag) | 銅(Cu) | 鉄(Fe) | アルミニウム(Al) | 硅素(Si) | 塩素(Cl) | その他 | |
| 漢中平紀年大刀 | | | | | | | | | 中国後漢製・2世紀・金象嵌 |
| 七 支 刀 | 7 9 . 2 | | | | | | | | 韓国百濟製・4世紀・金象嵌 |
| 『塵袋』護身剣 | | | | | | | | | 韓国百濟製・3~4世紀・金象嵌 |
| 王賜銘鉄劍 | | | | | | | | | 日本製・5世紀・銀象嵌 |
| 辛亥銘鉄劍 | 7 3 | 2 7 | ○ | — | — | — | — | — | 日本製・5世紀・金象嵌 |
| 銀象嵌大刀 | — | ◎ | — | ○ | — | — | — | — | 日本製・5世紀・銀象嵌(純銀) |
| 銘 文 額田部臣銘大刀 円頭柄頭 | — | ◎ | — | ○ | — | — | ○ | — | 日本製・6世紀・銀象嵌(純銀) |
| — | — | ◎ | — | ○ | — | ○ | — | — | 日本製・6世紀・銀象嵌(純銀) |
| 戊辰銘大刀 | — | — | ○ | — | — | — | — | — | 日本製・7世紀・銅象嵌(純銅) |
| 金錯銘直刀 | | | | | | | | | 日本製・7世紀・金象嵌? |
| 丙子椒林劍 | | | | | | | | | ?・7世紀・金象嵌 |
| 三 寅 鍔 | | | | | | | | | ?・8世紀・金銀象嵌 |
| 坂上田村麿將軍劍 | | | | | | | | | 日本製・9世紀・金象嵌 |
| 相應和尚劍 | | | | | | | | | ペルシャ製?中国製?・9世紀・金象嵌 |
| 流庵寺鉄劍 | | | | | | | | | 日本製?・9~11世紀・銀象嵌 |
| 禡 祭 剣 | | | | | | | | | 日本製・14~16世紀・金銀象嵌 |
| 有銘環頭大刀 | — | ◎ | — | ○ | — | — | — | — | 韓国・5~6世紀・銀象嵌(純銀) |
| 有銘円頭大刀 | | | | | | | | | 韓国・5~6世紀・金象嵌 |
| 亀甲線 星塚2号墳円頭柄頭 鳳凰文 | ◎ | ○ | — | ○ | ○ | ○ | — | — | 日本製・6世紀・金象嵌 |
| — | — | ◎ | — | ○ | ○ | ○ | — | — | 日本製・6世紀・銀象嵌(純銀) |
| 円頭柄頭 勝福寺古墳北墳 鞘口金具 | ◎ | ○ | — | — | — | — | — | — | 日本製・6世紀・金象嵌 |
| — | — | ◎ | — | ○ | ○ | ○ | ○ | S 硫黄(S) | 日本製・6世紀・銀象嵌(純銀) |
| 頭椎柄頭 柳谷古墳 円頭柄頭 | — | 9 8 . 2 | — | 1 . 3 | — | — | — | — | 酸素(O)0.5 日本製・6世紀・銀象嵌(純銀) |
| — | 9 0 . 9 | — | 5 . 9 | 0 . 2 | 0 . 2 | — | — | — | 酸素(O)2.9 日本製・6世紀・銀象嵌(純銀) |
| 円頭柄頭 垣内田2号墳 鞘尻金具 | — | 9 6 . 5 | 0 . 2 | 1 . 2 | 0 . 9 | 0 . 5 | 0 . 6 | — | 日本製・6世紀・銀象嵌(純銀) |
| — | 9 4 . 7 | 0 . 9 | 1 . 4 | 0 . 8 | 0 . 4 | 2 . 4 | — | — | 日本製・6世紀・銀象嵌(純銀) |
| 本郷大塚 円頭柄頭 | — | ◎ | — | ○ | — | ○ | — | — | 日本製・6世紀・銀象嵌(純銀) |
| 山畠22号墳円頭柄頭 | — | ◎ | — | ○ | ○ | ○ | ○ | — | 日本製・6~7世紀・銀象嵌(純銀) |
| 西穂波C3号墳頭椎柄頭 | — | ◎ | — | ○ | ○ | ○ | ○ | — | 日本製・7世紀・銀象嵌(純銀) |

◎ 最も多く存在する元素

○ 検出された元素

— 検出されない元素

- ・ 硅素・アルミニウム・塩素が検出され、鉄地と土壤成分の硅素・アルミニウム、銀鍔の塩素を除くと銀が残る。ほぼ純銀である（註18）。

以上の18例の分析結果を検討すると、文字象嵌と文様象嵌の違いにも拘わらず、金象嵌は20数%の銀を含む濃度70~80%の金線を使い、銀象嵌はほぼ純度100%の純銀にちかいものを使い、銅象嵌もほぼ純度100%の純銅にちかいものを使っていることが判る。

（3） 象嵌の技法

我が国で、現在までに知られている古墳時代から中世までの現存する銘文大刀12例と象嵌装飾大刀250例以上の象嵌技法は、総て糸象嵌技法である。前述のように象嵌のX線透過写真、脱落した象嵌線や象嵌線の脱落した溝、などの観察から糸象嵌の手法を読み取ることができる。即ち、線彫り整で一打ずつ整を進めて断面V字状、平面は節枝状の溝を彫り、その溝に、金・銀・銅の細線を整と槌で打ち嵌め込み、両側のかえりを内側に折り倒して、鏢と砥石で研ぎ仕上げするのである（図9）。

しかし、同じ糸象嵌技法にあっても、整一打の運びの長さや象嵌線の幅に明確に差異をみいだすことができる（表4・図10）。

漢中平紀年大刀、七支刀は、元来伝世を意図して造られて、幾度かの研磨を経ているものと思われるが、整一打の長さは1.0 ~1.2 ミリメートル、復原できる象嵌線の幅は1.0 ミリメートル以下と推測できる。

辛亥銘鉄劍、額田部臣銘大刀、戊辰銘大刀は、被葬者の生前の功績を讃える記念碑的な大刀で、製作後程なく副葬されたものと考えられ、原状を良く保つ。これらの整一打の長さは1.0 ~1.2 ミリメートル、象嵌線の幅は1.0 ミリメートル前後をはかる。

また、四天王寺・七星剣、三寅釧、襷祭劍等の象嵌線の幅は、幾度かの研磨を経て細くなつてはいるが、その繊細な文字・文様から復原できる整一打の長さは0.4 ~0.5 ミリメートル、象嵌線の幅は0.5 ミリメートル以下と推測できる。

このように、古墳時代と飛鳥・奈良時代を境にして整一打の長さが1.0 ミリメートル前後から0.5 ミリメートル前後へとおよそ二分の一の小刻みなものとなり、線画の幅も1.0 ミリメートル前後から0.5 ミリメートル前後へとおよそ二分の一に細くなるのは、より繊細な文字・文様を象嵌するための技術上の革新とみられる。

以上のように中国や朝鮮半島からもたらされて、古墳時代に始まる日本の象嵌技法は、金象嵌の金・銀の合金比率、銀・銅象嵌の純銀・純銅の使用、金・銀・銅の金属種と色彩の明瞭な使用区分、糸象嵌の整運び一打の長さと象嵌線の幅などに、明確な規則性をもっている。この規則性の汎時代性・汎地域性は、この時代既に象嵌技法が確立され、その厳密な規制の存在したことを見窺わせるものである。

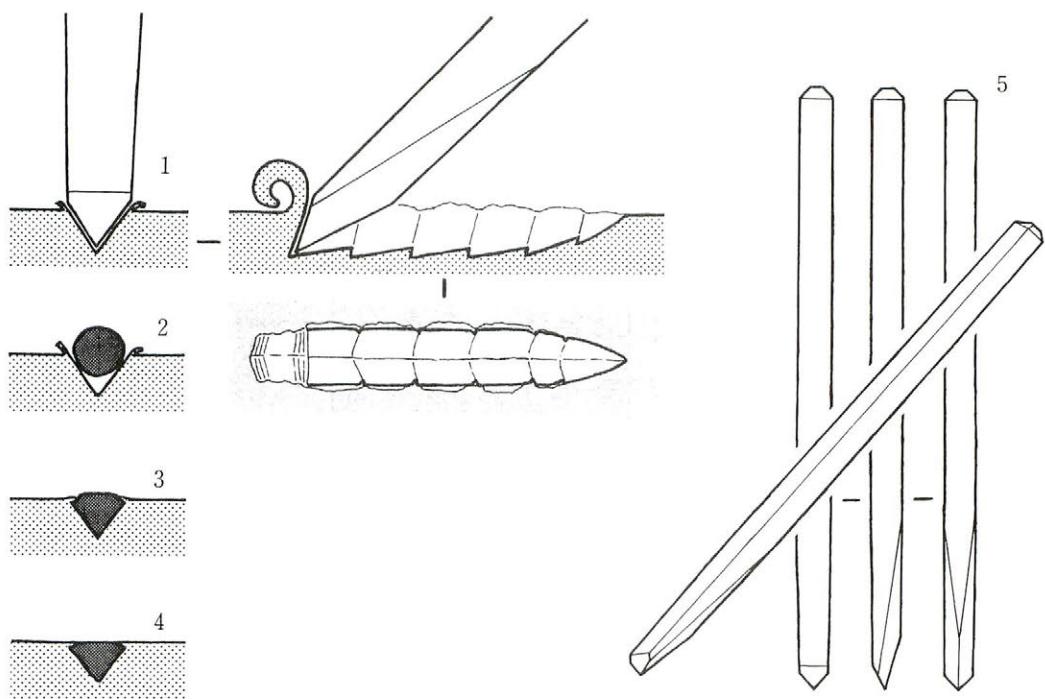


図9 象嵌技法(糸象嵌)
1 彫り盤で象嵌溝を彫る
2 象嵌線を溝に嵌める
3 象嵌溝の両側の
カエリを内側に折り象嵌線をタタキ込む
4 鍛で研いで仕上げる
5 彫り盤

Fig.9 Line inlay technique

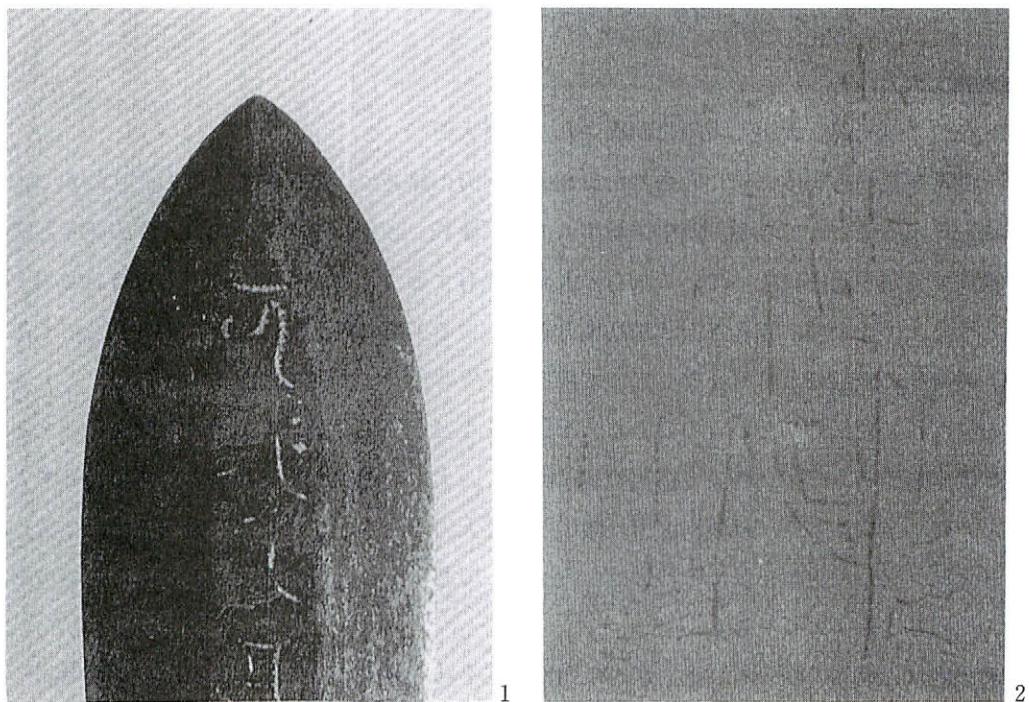


図10 象嵌盤のはこび
1 褐祭劍 2 三寅劍(エミシオグラフィー)

Fig.10 Inlay technique
1 Basaino-tsurugi 2 Sanin-ken

表4 銘文大刀等象嵌の鑿彫りと象嵌線の幅
Table.4 Dimensions of cuts forming the inscribed lins for inlays

| 銘文大刀の名称 | 鑿一打の長さ (mm) | 象嵌線の幅 (mm) |
|---------------|-------------|-------------|
| 漢中平紀年大刀 (金象嵌) | 1. 0 ~ 1. 2 | 0. 5 ~ 0. 8 |
| 七 支 刀 (金象嵌) | 1. 0 ~ 1. 2 | 0. 4 ~ 0. 5 |
| 辛亥銘鉄劍 (金象嵌) | 1. 0 ~ 1. 2 | 0. 8 ~ 1. 0 |
| 銀象嵌大刀 (銀象嵌) | 1. 0 | 0. 5 ~ 0. 6 |
| 額田部臣銘大刀 (銀象嵌) | 1. 0 | 0. 7 ~ 1. 2 |
| 戌辰銘大刀 (銅象嵌) | 1. 0 ~ 1. 1 | 0. 3 ~ 0. 5 |
| 有銘圓頭大刀 (金象嵌) | 1. 0 ~ 1. 2 | 0. 7 ~ 0. 9 |
| 有銘環頭大刀 (銀象嵌) | 0. 8 ~ 1. 0 | 0. 9 ~ 1. 0 |
| 四天王寺七星劍 (金象嵌) | 0. 4 ~ 0. 5 | |
| 三 寅 鍔 (金銀象嵌) | 0. 4 ~ 0. 5 | 0. 25 |
| 禡 祭 剣 (金銀象嵌) | 0. 4 ~ 0. 5 | 0. 5以下 |

鑿一打の長さは直線またはゆるやかな曲線部分の計測による

4. 象嵌銘文大刀

(1) 伝世された銘文大刀と古墳に副葬された銘文大刀

中国・朝鮮半島から日本にもたらされた象嵌銘文大刀の銘文に、象嵌銘文大刀の原初的かつ基本的な意味を読み取ることができる。漢中平紀年大刀や『塵袋』護身剣、七支刀には、作刀紀年と辟災・招福を念願する句が記されていて、これらの大刀を保有することによって、権力の保持と辟災・招福が可能となる、すなわち、搖るぎなき最高権力を保持する王權の証として代々伝世されたのである。

『塵袋』護身剣は破敵剣と一対をなして、焼損する平安時代にまで朝廷に伝世していたし、七支刀は石上神社に現在まで伝世しているのである。伝世することを強く意識して造られた銘文大刀である。

銘文の基本形である紀年と辟災・招福の句に加えて、大刀の贈賜者や受賜者名、作刀者等の人名が加わったのが、辛亥銘鉄劍、銀象嵌大刀、額田部臣銘大刀である。これらは、畿内王權の地方への拡大・伸長を助け支えた功績を讃える功労記念の品として製作され、所持者の死とともに古墳に副葬された、一代限りの銘文大刀である。

王賜銘鉄劍は、畿内の贈賜者「王」が、畿内と上総を結ぶ要衝の地の管理にあたる受賜者に、その地位と職掌の証として授け、受賜者の死とともに古墳に副葬された。戌辰銘大刀もまた同様に畿内の贈賜者が、畿内と伯耆・出雲を結ぶ出雲路要衝の地の管理にあたる受賜者に、授けた剣であろう。こ

れらの大刀もまた、一代限りの銘文大刀である。

飛鳥・奈良時代になって、中国から新たにもたらされた三寅鉄や七星剣に描かれる銘文・図像は、辟災・招福を神仏に求めており、ここには、既に、権力の証しとしての銘文大刀の政治性は弱められている。平安時代以後の、相應和尚剣や禱祭剣のように不動明王に辟災や病気の平癒を祈願する内容になっているのも、辟災・招福の願いのみが継続して付与される、政治性を持たない象嵌銘文大刀であるゆえんである。

(2) 象嵌銘文大刀の所有者

古墳に副葬された象嵌銘文大刀は、遺跡の位置・規模・共伴遺物によって、その所有者を推測することができる。

漢中平紀年大刀の発見された奈良・東大寺山古墳は、大和盆地北部一帯を見下ろす尾根陵線上にある長さ140mの大前方後円墳で、その規模や後円部粘土櫛から発見された刀劍・銅鏡・玉類・鍬形石・車輪石などの豊富な副葬品は、4世紀の大和盆地北部一帯を治めた豪族に相応しいものである。或いは、前項に述べた伝世すべき象嵌銘文大刀である漢中平紀年大刀を保有した、王権の地位にあった人物の古墳とも考えられる。

5～7世紀の北武藏の地一帯を支配した豪族の代々が葬られた埼玉（さきたま）古墳群、そのなかにあって5世紀の後半に生きた平獲居臣が葬られた稻荷山古墳は、全長119メートルの前方後円墳で二重の周壕をもつ。その規模の大きさや銅鏡・刀劍・甲・馬具・帶金具・玉類などの豊富な副葬品はまさしく埼玉一帯を支配するに相応しい豪族であることを示している。

菊地川の流域に広がる玉名平野を見下ろす台地上にある清原古墳群の一つ、江田船山古墳は全長62メートルを計り、周壕をもつ前方後円墳である。豪華な金銅製冠帽や金銅製飾履、帶金具・銅鏡・刀劍・甲冑・馬具などが家形石棺から発見されている。銀象嵌大刀に記された无利豆は、5世紀後半に北肥前の地にあってこの地一帯を支配した豪族に相応しい豪華な副葬品に囲まれて葬られている。

岡田山1号墳は、意宇平野を一望する意宇川の左岸の低丘陵上に位置する、岡田山古墳群の1つで全長24メートルを計る前方後方墳である。横穴式石室に家形石棺が配置され、大刀・銅鏡・馬具・銅鏡・金銅製丸玉・須恵器等が発見されている。象嵌大刀に記された額田部臣は意宇郡と隣接の大原郡にも居住するが、古墳時代の出雲あるいは大原・意宇の地域を支配した豪族であった。

東大寺山古墳の被葬者や平獲居臣、无利豆、額田部臣は、後の律令制下の大和国・武藏国・肥後国・出雲国または大原・意宇郡にあたる地域をそれぞれ支配した豪族達であり、かつ、畿内の中央政権と密接な繋がりを持っていた豪族と思われる。

王賜銘鉄劍が出土した稻荷台1号墳は、12基以上よりなる稻荷台古墳群のなかでは最大規模の直径18メートルの円墳で、木棺直葬にともなって短甲・鉄劍・鉄鎌・刀子等が発見された5世紀前半の古墳である。稻荷台1号墳は畿内より東海道と東京湾を経て上総・下総にいたる重要な交通路の要衝にある。また、戌辰銘鉄刀の発見された箕谷2号墳は、4基よりなる箕谷古墳群中では最も大きい直径

12~14メートルの円墳で、横穴式石室より直刀・鉄鎌・馬具・耳環・須恵器等が発見されている。箕谷2号墳は畿内と伯耆・出雲を結ぶ重要な交通路の要衝にある。

王賜銘鉄劍と戊辰銘鉄刀の所有者は、古墳時代の地方有力者であると同時に、畿内と地方を結ぶ交通の要衝を管理する特殊な役割を担っていたものと思われる。

現在までに250例ほど知られている古墳時代象嵌文様大刀は、柄頭・鍔・巾頸・鞘尻・刀身等に施された文様象嵌に見られる、糸象嵌技法の選択、象嵌線の金属種の選択における16~17金・純銀・純銅の規則性、鳳凰・龍などの文様の採用と変化の画一性などから、単一工房において製作されたものと推測された。そして、象嵌文様大刀の所有者は、5世紀半ばより時代の経過とともに、一国規模の地方を支配する豪族から一郡規模の地域を支配する有力者へ、さらに一里規模の有力者へと拡大し、それぞれに贈賜された刀劍は、その地位によって刀身に象嵌された大刀、環頭・円頭・頭椎・方頭に象嵌された大刀、鍔のみに象嵌された大刀と明確に順位づけされている（註22）。

古墳時代象嵌銘文大刀もまた、これと軌を一にしている。大王政権下の工房で、象嵌技法・象嵌材料・文字・文様などあらゆる要素が強力な規制のもと独占的に製作された。そして大王より下賜された象嵌銘文大刀を所持した人は、象嵌文様大刀所有者の更に上位に順位づけされる人々であった。大王その人は舶来の象嵌銘文大刀を代々伝承し、大王の下賜した象嵌文様大刀は、大王の政権に参画し政権を支える大王と密接にかかわりのあった地方豪族達によって所持され、副葬されたのであった。

追記 本稿は1995年1月14~15日に開催された、日本文化財科学会設立10周年記念シンポジウム『科学が解き明かす古墳時代』にて「文字の書かれた大刀の世界」と題して行った講演をまとめたもので、1994~95年度文部省科学研究費一般研究(C)『日本象嵌技法の系譜－材質・技法の科学的分析からの研究』の成果の一部を含んでいる。

銘文大刀の調査には、所蔵者・保管者各位のご好意を得たほか、報告書・図録・関係論文等さまざまな資料を利用した。また、象嵌銘文、文様の科学的分析は(財)元興寺文化財研究所保存科学研究室松田隆嗣(現・福島県立博物館)氏、国立歴史民俗博物館田口勇(現・専修大学)・斎藤努両氏の行ったもののはかは、筆者が(株)堀場製作所分析センターにお願いした。英文抄訳はジェイムス・スワン先生に校閲いただいた。各位に感謝申し上げます。

註

- (1) 梅原末治「日本出土の漢中平紀年大刀一大和櫟本東大寺山古墳出土品」(『大和文化研究』7-11、1962年) ほか
- (2) 福山敏男「石上神宮の七支刀」(『日本文化の起源』2、1971年) ほか。象嵌線の分析値については奈良国立文化財研究所肥塙隆保氏のご教示による。

- (3) 『塵袋』日本古典全集、東野治之「護身剣銘文考」(『文学』48-3、1980年)
- (4) 市原市教育委員会ほか『王賜銘鉄劍概報』(1988年)
- (5) 埼玉県教育委員会『埼玉稻荷山古墳辛亥銘鉄劍修理報告書』(1982年)ほか
- (6) 梅原末治『玉名郡江田村船山古墳調査報告(上・下)』(1921年)、東京国立博物館編『江田船山古墳出土国宝銀象嵌大刀』(1993年)ほか
- (7) 島根県教育委員会『出雲岡田山古墳』(1987年)ほか
- (8) 八鹿町教育委員会『箕谷古墳群』(1987年)
- (9) 末永雅雄「金錯銘直刀身」(『考古学雑誌』56-1、1970年)
- (10) 末永雅雄『日本上代の武器』(1941年)
- (11) 小海町教育委員会『三寅剣』(1994年)、西山要一「三寅鉄の象嵌技法とX線透過写真・エミシオグラフィーによる研究」(『文化財学報』13 1995年)
- (12) 『公衡公記 昭君門院御産愚記』史料纂集(1974年)、水野正好「古代まじない世界——攘災・招福・呪詛」(『神と人 古代信仰の源流』1986年)
- (13) 『明匠畧傳』群書類從・第五輯(1960年)、水野正好「古代まじない世界——攘災・招福・呪詛」(『神と人 古代信仰の源流』1986年)
- (14) 福島県教育委員会・棚倉町教育委員会・福島県立博物館の1994年12月6日の記者発表資料、福島県教育委員会文化課(荒木隆)『流廃寺跡第2次調査の概要』(1996年3月、第38回福島県考古学会大会発表要旨)
- (15) 西山要一「中世の銘文大刀——山形県上杉神社伝世禡祭剣にみる銘文大刀の系譜」(『求真能道』1987年)
- (16) 東京国立博物館『有銘環頭大刀』(1992年)ほか
- (17) 韓永熙・李相洙「昌寧校洞11号墳出土有銘円頭大刀」(『考古学誌』2、1990年)
- (18) 斎藤努・田口勇・西山要一「X線CTなどを用いた象嵌資料の非破壊分析」(『国立歴史民俗博物館研究報告』26、1990年)
- (19) 西山要一「柳谷古墳出土銀象嵌柄頭の保存処理と材質分析」(津山市教育委員会『柳谷古墳』1988年)
- (20) 西山要一「垣内田3号墳出土の象嵌円頭柄頭・鞘尻金具の元素分析と保存処理」(三重県教育委員会『近畿自動車道(久居~勢和)埋蔵文化財発掘調査報告 第2分冊2』1990年)
- (21) 西山要一「金属製品の分析調査」(須坂市教育委員会『本郷大塚古墳』1992年)
- (22) 西山要一「古墳時代の象嵌——刀装具について——」(『考古学雑誌』72-1 1986年)

A Study of Swords with Inlaid Characters

Yōichi NISHIYAMA

Conservation and Restoration, Department of Study of Cultural Properties, Faculty of Letters, Nara University
1500, Misasagi-cho, Nara, Japan

Including those found only in records, it is believed that 15 swords with inlaid characters were known in Japan, of which 12 are still extant: eight from the KOFUN Period (4th – early 7th c. A. D.) and four from the ASUKA Period onward (the mid-7th c. - 15th c. A.D.).

The swords themselves are of iron, and the inlays, telling the date of manufacture, the historical background, owner's name, auspicious words, and so on, are of gold, silver, or copper. These swords are of immense value as historical data.

The present author has studied all fifteen extant swords in four ways: surveys of the sites where they were found, literary analyses of the inscriptions, examination of the inlay techniques used, and a metallurgical analysis of the inlays.

From these extensive studies, the author thinks that four things may be said:

1. The nine sword dating from the KOFUN Period may be grouped into two categories: those handed down from generation to generation of kings, and those made for one generation of local rulers.
2. The KOFUN Period swords were manufactured in China, the Korean peninsula, and Japan; the foreign-made swords, accorded higher status, were used by generations of kings, while the domestically-produced swords were exclusively manufactured by the Yamato government for presentation to local rulers.
3. The KOFUN Period inlaid swords were symbols of political, military and economic power.
4. With the exception of the Emperor's sword, after the KOFUN Period these swords lost their political and economic symbolism, but continued as inspirational artifacts, encouraging victory, health, and happiness.